

図書館だより

文化学園図書館

文化学園大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.154

2012年6月20日発行
東京都渋谷区代々木3～22～1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

男女共学 初年度

文化学園大学 服装学部長 池田 和子

平成24年度は本文化学園大学が初めて男子学生を受け入れた記念すべき年となった。そこで、服装教育に男子学生が初入学した時代への興味から図書館に足を運んだ。

服装教育への男子入学の先達は、文化服装学院において、昭和32(1957)年に入学者総数7000名中23名であり、なんとスタートは55年も前であった。

昭和32年当時は、戦後の岸信介内閣の時代で、経済は鍋底不況と呼ばれる状況にあった。しかしその後、高度経済成長を牽引した池田勇人内閣の所得倍增計画が3年後に始まり、国民すべてが豊かさを求めて邁進する時代のさきがけとしての、様々な現象がすでにみられた。NHKのテレビのカラー放送実験局開局をはじめ、三菱の自動鉛筆削り器シャープナー、ソニーの世界最小トランジスタラジオ、日産自動車のプリンス・スカイラインの発売開始、西銀座にショッピングセンターの開店等である。そのような都市文化としての東京への憧れからか、家出件数が過去最高を記録、東京都の人口が851万8622人で世界一となっている。そして、茨城・東海村に「原子の火」がともった年でもあった。

入学スタート時期の服装教育における男子学生が占める割合は、わずか約0.3%程度であったが、そ

の後は徐々に増加し、現在の文化服装学院の男子数は約3割程度である。この男女比は、海外での調査でも同様で、中国、韓国、台湾のいずれの大学でも、男子が約1、2割の間で推移している。今回の文化学園大学の入学男子数も全体の約1割である。服装学を学ぶ学生は女子のほうが圧倒的に多いが男子も一定数必ず存在していることがわかる。

そんな社会背景や洋裁としての女子教育全盛の中で、職業として服装のプロを目指した男子1期生は、「僕たちはこの学校に入学願書を出す時、本当に命がけといっても大げさでない決意をして入り、入学式とその後数ヶ月はマスコミの取材攻勢に会い、授業もろくろく受けられないほど騒がれた」と語っている。男子には入学時から高い職業意識が見られ、後にはファッション界のみならず、教育界等へも多くの人材を輩出している。55年の歴史から一時代を築き、世界的に活躍するデザイナーとして、高田賢三、山本耀司、田山淳朗などが出ている。今年入学した本学の男子1期生の今後の活躍を期待したい。

図書館を利用して、時空を超えた楽しい時間を過ごすことができた。学生の多いなる利用を望む。

引用 *小池千枝他(編)『文化服装学院教育史 創設70年のあゆみと未来』文化服装学院 1999(377.3/B)

『世論』

文化学園大学教授(現代アメリカ論担当) 中沢 志保

学生時代に読んだものの中で、折に触れ読み返す本がある。リップマン(Walter Lippmann)の名著『世論』である。国際関係学を学び始めた大学1年生の頃に何かの授業で、参考文献の一つに挙げられていた。「『20世紀最高のジャーナリスト』で、『冷戦』という言葉を最初に使った人」という教員の解説に惹かれたのかもしれない。早速近くの書店に立ち寄った記憶がある。

リップマン(1889~1974)の名前が世界的に知られるようになったのは、1931年彼が『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』紙のコラム“Today and Tomorrow”を担当するようになってからであるが、『世論』はそれより10年近く前の1922年に刊行された。この本についての解説でよく目にするのは、「人間の思考・行動と環境との関係を解き明かそうとした」というもので、「キーワードは『疑似環境』と『ステレオタイプ』』といったたぐいの説明である。

読み始めてまもなく「われわれはたいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る」という文章が目飛び込んできた。もちろん、赤いボールペン(マーカーはまだ一般的ではなかった)で印をつけた。うん、うん、と頷きながら線を引いていたのであるが、今考えてみればこの行為そのものが「定義してから見る」タイプの行動だったかもしれない。「なるほど、これがよく引用される文章だ」などと何かを発見したような気分になっていたのだから。

大学院生の時に、この本を再び手にした。国際関係学という専門領域になじみきれない自分自身に気づき、少し焦りを覚えていた頃である。1919年のパリ講和会議(第一次世界大戦を終結させた平和

会議)にアメリカ代表団のひとりとして出席したリップマンは、そこで大きな挫折感を味わい、政治の第一線から離れてジャーナリズムの世界に戻っている。注意深く『世論』を読むと、この会議での苦い体験が随所に描かれていることに気付く。国際関係を「力」ではなく、「法と国際機構」で先導しようという大胆な戦後プラン(ウィルソン米大統領が「十四カ条」という形で打ち出した)を引っ提げて会議に臨んだリップマンらは、海千山千の老獪^{ろうかい}なヨーロッパの政治家たちに振り回され、「十四カ条」は完全に骨抜きにされた。核兵器の廃棄を訴える原子科学者の運動を修論のテーマにしようと考えていた私は、そのテーマが冷戦という厳しい「現実」の中で何の意味を持つのかと教員から鋭く指摘されていた。理念先行型の研究だと批判された自身を、大國間の利害対立のはざままで平和への実現を阻まれたリップマンに(図々しくも)重ねていたのだと思う。

3年ほど前、『世論』を何十年かぶりに読む機会を得た。「大衆社会の出現と民主主義——リップマンとオルテガを中心に」というテーマで卒論を書いたゼミ生がいたからである。彼女は、現代の民主主義政治がその正当性を求めるとき、「国民の声」である「世論」が異様なほどに意識されることに注目した。その「世論」は、だいたいにおいて「定義してから見る」タイプの大衆が、「ステレオタイプ」化された情報を得る中で形成されるのである。この時は、現代の大衆社会に対してリップマンが抱いた危機感を共有するような読み方をしたように思う。次に『世論』を手にする時には、どんな視点からアプローチすることになるのだろう。

*W.リップマン著;掛川トミ子訳『世論』上・下
岩波文庫 1987<081/I>

Pochoirs japonais : Motifs décoratifs tirés des pochoirs japonais

文化ファッション研究機構教授 高木 陽子

本書 *Pochoirs japonais: Motifs décoratifs tirés des pochoirs japonais* (日本の型紙: 日本の型紙による装飾モチーフ集) は、パリの室内装飾家・建築家テオドール・ランベール (Théodore Lambert, 1857 - 没年不詳) の序文と日本の染型紙120点の複製を掲載したフォリオ判50枚によるポートフォリオである。パリのCH. マッサンより1909年頃出版された。

掲載された型紙の多くはパリ装飾美術館所蔵、ほかに画家ウジェーヌ・グラッセや宝飾師アンリ・ヴェヴェールなど極東美術の愛好家たちのコレクションも含まれている。

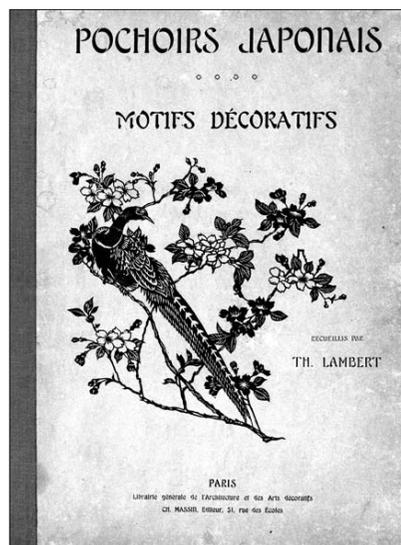
型紙とは、江戸小紋や浴衣などの生地に柄や文様を染める工程で用いられる道具である。柿渋で加工した和紙に、花鳥風月や言葉遊びなど多彩な文様を独特の彫刻刀で彫りぬく。彫刻技法には、鋸彫り、突彫り、縞彫り、道具彫りの4種類があり、より堅固な型にするため糸入れという補強技法が考案された。江戸時代に、現在の三重県鈴鹿市白子・寺家を中心に発展し、全国の染め屋へ供給され、明治前期まで隆盛を極めた。つまり、型紙とは各時代の流行を取り入れた、日本独自のデザインが高度な技術で彫り込まれた工芸品なのである。

江戸末期の開国をきっかけに海を渡った日本の造形は、西洋人に驚きのある目をもって迎えられ、ジャポニズムと呼ばれる現象を引き起こした。印象派への浮世絵版画のインパクトについては既に詳しく紹介されているが、デザイン

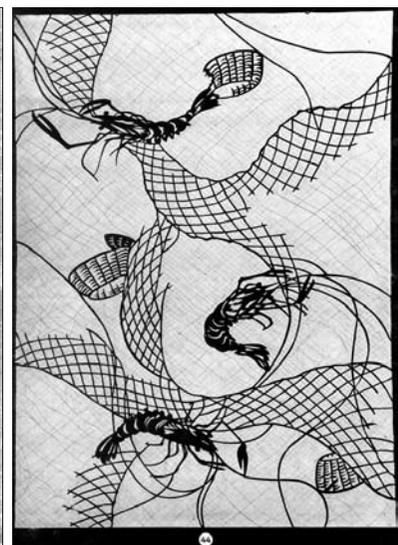
の領域で深く関与したのは染めの型紙であった。型紙は、その斬新な意匠や高度な技術が高く評価され、アーツ・アンド・クラフツ運動、アール・ヌーヴォー等の美術・工芸改革運動に大きな影響を与えた。

型紙が実際どのような経路で西洋に舶載されたかの詳細はほとんど知られていない。しかし、1884年に英国リパティ社が型紙を輸入してステンシル装飾用に販売していたこと、1880年代後半に欧米各地の産業博物館で大量の型紙収集が始まったことから、1880年代にデザイン資料としての重要性が高まったことが推定できる。

ロンドンのサウス・ケンジントン博物館 (現ヴィクトリア&アルバート博物館) にならって、フランスでは産業と芸術教育のために、1864年に産業応用美術中央連合が創設された。現在のパリ装飾美術館に発展する組織である。19世紀末から20世紀初頭にかけて、この装飾美術館に未整理の型紙が、日本



表紙(本書より)

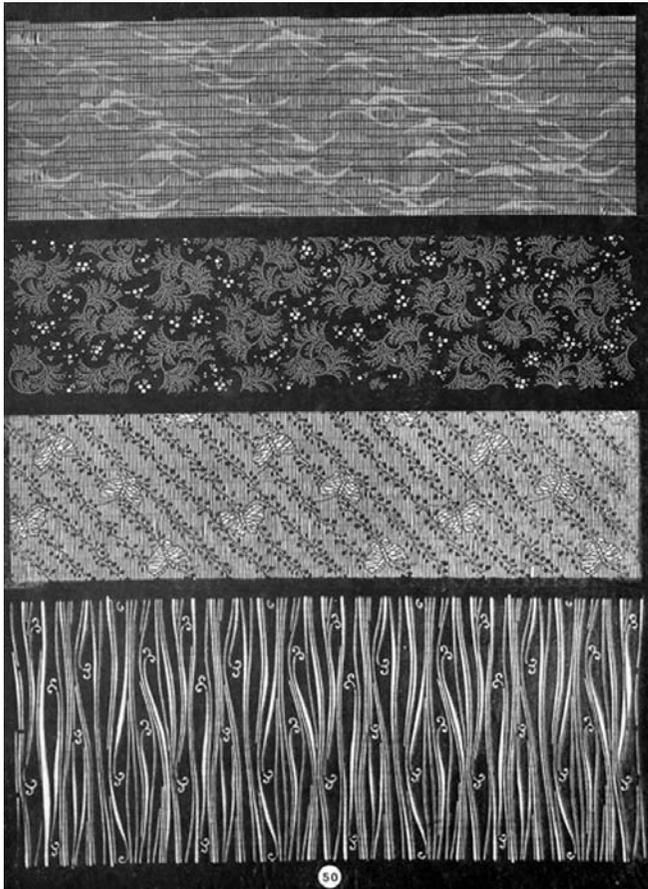


No.44(本書より)

美術愛好家、壁紙・繊維関連の実業家から、そしてS.ピングの遺品として1500点ほど収められた。

産業と美術の資料としての型紙のデザインは、S.ピング編の月刊誌 *Le Japon artistique* (芸術の日本) (1888 - 1891) に掲載された後、アンドリュウ・W. テュアーによる *The Book of Delightful and Strange Design* (100点の型紙図案集) [1892] など各国で次々と出版された。

本書は、序文によると、「建築家、刺繍家、図案家、金具職人、金銀細工師、教師、装飾画家、製本職人、彫刻家」の想像力を育むために型紙のモチーフを提供するものであった。本書に収められた図版 No.50 の下段「先の細くなった線」は画家グラッセが所蔵していた型紙である。グラッセは宝石師ヴェヴェールのために《櫛: ナイアート》(パリ市立プティパレ美術館所蔵) のデザイン画を制作した。この櫛



No.50(本書より)

の、波の単純化されたうねりの表現は、グラッセ所蔵型紙の表現に近い。1900年のパリ万国博覧会で展示され、評論家たちの注目を集めたこの作品は、日本では蕨の文様であった造形が、フランスで波文様と解釈されていく様子をしめしているのである。

ところで本書には出版年の記述がないにもかかわらず、掲載型紙リストの下に記載された1行「PARIS. - L.MARETHEUX, IMPRIMEUR, 1, RUE CASSETTE. - 1878」を根拠に、1878年出版と推定されてきた。しかし、この推定出版年は、序文冒頭の記述「日本の型紙がヨーロッパに輸入されるようになり30年がたつ」と矛盾する。西欧の産業博物館に先駆けて、サウス・ケンジントン博物館が型紙を収蔵したのは1879年からであり、それは西洋世界における型紙の黎明期であったはずだ。

フランスには、わが国の納本制度に相当する制度が存在する。フランス国立図書館の記録を調べたところ、本書は1909年に納本されていた。この年は本書序文の記述にほぼ適合することから、1909年頃を出版年とするのが適当である。

筆者は、型紙が欧米の1900年前後のデザインに与えたインパクトをここ数年共同研究してきた。その成果を、国内外70か所の機関が所蔵する約400点の造形でたどる「KATAGAMI Style」展が東京、京都、三重を巡回中である。染色工房内の道具ゆえ、日本人でもあまり目にする事がなかった型紙と、西洋のデザイン改革期の代表作の数々を実際に比較してほしい。型紙が染色という本来の用途を超えて、西洋各地の文脈で自由に解釈されていた事実を理解することができるだろう。

展覧会「KATAGAMI Style」:

三菱一号館美術館 2012年4月6日—5月27日

京都国立近代美術館 7月7日—8月19日

三重県立美術館 8月28日—10月14日

カタログ:

馬淵明子/高木陽子/長崎巖/池田祐子監修

『KATAGAMI Style』2012年、日本経済新聞社

『日本の色辞典』

文化服装学院講師(色彩計画・色彩論担当) 天野 豊久

以前、社会人を対象としたカラーコーディネーター養成講座を担当していた頃、初心者に「人は色を何色見分けられると思うか」と質問すると、約200色がそろった教材を目の前にしているにもかかわらず、20色とか30色と答える人がたまにいた。話をしてみると、目で「見分ける」と言葉で「言い分ける」との違いに混乱があった。わずかに違う赤を並べて見比べれば、それらはごく似ていても異なった色として認識はできる。しかし、自分のスキルでその違いを言い分けることができず、言葉では同じ「赤」になってしまう。だから、その人たちにとっては「見分けて」いることにはなっていないのかもしれない。人はつくづく言葉に支配されやすい。

私たちが日常生活で頻繁に使っている色の名前は十数種類程度だといわれている。ファッション雑誌などをめくって行けば、写真のキャプションにいろいろな色名を発見することができるが、色そのものは画像でわかるし、よほど興味がなければその色の名前に注意を向けることは少ないだろう。さらに、それを自分自身のポキャブラリーとして活用できる人はたぶんほとんどいない。使う必然性や機会がなければ、覚えてもやがて忘れる。ちなみに、明治や大正、昭和初期の雑誌や新聞記事には「利休色」とか「海松色」といった今ではあまり聞き慣れない色の名前をしばしば見つけることができる。当時のメディアの表現手段は基本的に「言葉」だ。色さえ言葉で表現しなければならない。当然、日常的に使われる色の名前は今日より多かったのだろうと想像できる。

しかし、今やビジュアル情報あふれる21世紀

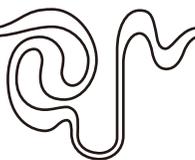
だ。現代の私たちは、色の名前など知らずとも不自由しないし、困らない。……ののだが、もし、あなたがファッションだとかインテリアだとかデザインだとかに関わろうとしているならば、色を言葉として表現する手段はそれなりに備えておいたほうがよいだろう。例えば、プレゼンのとき同じ色でも「明るい青」と「空色」、「セルリアンブルー」と言うのではみな印象が違う。言葉／色名は色にキャラクターを与える。情報の深みが増す。

色の名前を知りたいなら「色名事典」やそのたぐいの書籍が多数出版されているので手に入るとよい。たいていそれぞれの色に対して、その名の由来が解説されている。また、色の本なので読まずとも眺めているだけで豊かな気分になる。

染色家でもある吉岡幸雄の著した『日本の色辞典』(紫紅社)もそのひとつだ。和名が中心なのでこれ一冊あれば十全、というわけにはいかないが約400色名が採録、主要な色は染色生地 of 画像で示している。布のテクスチュアが色に存在感を与えており、印刷インクのベタ刷りよりもよほどリアリティがある。また、染料や染色の様子、その他関連する写真も多く収録され、解説にもボリュームがあり、読み物としても手応えがある。

品を欠く話だが、フルカラーおよそ300ページの単行本で約3500円也はものすごくリーズナブルだ。色彩の専門書籍としても費用対効果(?)がきわめて高い。著者とこれっぽっちも面識はなく宣伝する義理もないのだが、図書館で借りて気に入ったら、ぜひ一冊手元に置くことを勧める。

*吉岡幸雄著『日本の色辞典』紫紅社 2000(757.3/Y)



図書館からのお知らせ

図書館内で利用可能なLANについて

図書館内では有線と学内無線のLANが利用できます。

【有線LAN】

閲覧席の窓側の一人用席に設置しています。初めて利用する場合には、パソコンに初期設定(切替ソフトのインストール)が必要ですので、C館11階のオープンメディアルームで設定してもらってください。

【学内無線LAN】

スキャナー側の閲覧席エリアで利用できます。無線LANを利用するためのIDとパスワードは各学校のポータルサイトに記載されていますので、確認してください。

図書館だよりHP公開のお知らせ

図書館だよりを図書館ホームページに公開しました。図書館HPの「資料を探す」→「図書館だより」から見ることができます。

大学4年生のみなさんへ

インターネットでのILLの申込みが、大学4年生も利用できるようになりました。

「横断検索」および「利用者サービス(MyCARIN)」から申し込みできます。ご活用ください。

*ILL:当館で所蔵していない資料の複写・貸借を他大学・他機関に依頼するサービス

NetLibrary (eBook) を導入しました

OPACの検索結果から直接フルテキストの閲覧が可能です。また、図書館HPの「資料を探す」→「オンラインジャーナル・データベース(学内専用)」にリンクがあります。※受入タイトル数:11点、アクセスフリータイトル:洋書約3,500点(2012年5月現在)。

新規受入雑誌(2011年度) *は主な分野[]は所蔵館
—和雑誌・新聞—

Lips(年8回)*女性ファッション [新都心・小平]

技術情報(月刊)*クリーニング [新都心]

Libertin dune(年2回)*女性ファッション [新都心]

Gap press. Bridal(年2回)*コレクション [新都心・小平]

JICA's world(月刊)*国際協力 [新都心・小平]

全ドラ(月3回)*クリーニング(新聞) [新都心]

—海外雑誌—

The gentlewoman*女性ファッション [新都心]

Show/off(年1回)*アントワープ王立芸術アカデミーファッション科学生作品集 [新都心]

Vision = 青年視覚(隔月刊)*アジアファッション [新都心]

Paris, LA(年2回)*美術 [新都心]

Next look. Menswear(年2回)*情報誌 [新都心]

Close up. Runway : kids(年2回)*コレクション [新都心]

Style.com/print(年2回)*女性ファッション [新都心・小平]

Esquire : the big black book(年2回)*男性ファッション [新都心・小平]

Molecule : the element of fashion : catwalk.

Accessories(年2回)*情報誌 [新都心]

Colorules : palette schema of 20 best designers : women's wear collection(年2回)*コレクション [新都心]

VNA(年2回)*美術 [新都心]

In beauty(年2回)*美容 [新都心・小平]

In snap(年2回)*ストリートファッション [新都心・小平]

Muse(年4回)*女性ファッション [新都心・小平]

The heritage post(年4回)*男性ファッション [新都心]

雑誌はOPACで検索できます。所蔵巻号(保存年限)、配架場所を確認の上、ご利用ください。

不明な点はお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

TEL : 03-3299-2395 (新都心キャンパス図書館) / TEL : 042-327-8859 (小平キャンパス図書館)

図書館のホームページ <http://lib.bunka.ac.jp>